
ようこそ恋愛相談部へ！

鈴野宗一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よつこそ恋愛相談部へ！

【Nコード】

N0065Y

【作者名】

鈴野宗一郎

【あらすじ】

俺は中三の時に告白した。結果は・・・フラれた。そんな俺は心の傷が完全には癒えぬまま高校へ進学した。そこで俺はある部活と、4人の女子に出会った。この先、俺の未来はどうなるんだろうか・・・

始まりの恋（前書き）

どうも、鈴野宗一郎という者です。

初めての方は初めまして。

もう一つの方の小説を知ってらっしゃる方は・・・ありがとうございます。

こちらは、不定期更新となります。

・・・と言ってももう一つも不定期更新となってるようなモンなんですけどね。

それでは、今後ともよろしくお願いします。

始まりの恋

「はぁ……どうしよう……」

俺は、あの子に気持ちを伝えられるのだろうか。

好きになってしまった、あの子。

最初は幼馴染だったはずなのに……ってヤツさ。

……笑うなよ！しょうがないだろ！？好きになったんだから！

「……悩んでも仕方ない。行くか！」

部活帰りのその子に話しかける。

「ちよ、ちよつといいか？」

「え？未勇^{みゆう}？何か用？」

「ココじゃちよつと……一緒に来てくれるか？」

「？別にいいけど。」

俺は普段、めったに人が来ない校舎裏に来た。

「で？こんなとこまで連れて来て、何の用？」

「そ、その・・・な、えつと・・・」

「未勇らしくないわね。何よ?」

「その・・・お、俺と、付き合っしてほしい!」

「・・・ええ!? な、何の冗談よ・・・!」

「冗談じゃない。俺はお前が好きだ。俺と、付き合っ、くれないか?」

少し詰まらせながら言う。

俺は言った。言ったんだ!

返事を待っていると、声が返ってきた。

「・・・ごめん、私には私の好きな人がいるんだ・・・」

それに、未勇とは、幼馴染以上には考えられない・・・」

・・・ああ・・・。

「・・・そうか。ごめんな? お前の事を考えないで・・・」

「うん。未勇の気持ちは嬉しい。」

だから、これからも、一緒にいて楽しい幼馴染でいよう?」

・・・想定内の答えが返ってきた。

もちろん、フラれる事も考えていた。

ただ、実際に目の当たりにすると辛い部分があるな……

「……すまない。それは、出来そうに無い。」

「え？」

「俺、来週転校するんだ。昨日急に決まっつてな。」

「だから、こうして告白したんだ。」

そう。俺は来週の終わりにはここにいない。

この気持ちの踏ん切りをつけるために告白したが……玉砕しちま
つたな。

「そ、そんな……」

「大丈夫だ。会えなくは無。電車で1日あれば着く。」

長い休みに入ったら、ここに遊びに来るさ。」

「……そう。じゃあ、これから遊びに行かない？」

友達とか誘ってさ！」

「……そうだな。よし、行くか！」

こうして俺の人生初の告白は見事に玉砕した。

それから一週間。身のまわりの友達やらと遊びまくった。

良い思い出が出来たと、俺は思う。

そして・・・俺はこの街から離れた。

新生活スタート！（前書き）

今回から、話はスタートします。

前のはプロローグです。……って言わなくてもわかりますよね。

では、始めます。

新生活スタート！

俺の名前は五十嵐未勇^{いがらしみゆう}。

バリバリの高校1年生だ！

そして、現在恋人募集中！

……ウソです！今はそんな気は起きません！

理由？それは少し前に告白して玉砕したからさ！

さすがにまだ古傷は癒えないのですよ！

中学3年生での告白……ふっふっふ……

……はっ！やばいやばい。闇モードに入る所だったぜ！

まあ、そんなこんなで現在、登校中です。

つてか、今日は初日。つまり、入学式だ。

「……1人って……寂しいな……」

中学3年の3学期に転校。

その為、俺の出身校の友人はいない。

「よつす！みゆつち！元気が！？」

「……訂正、コイツ以外はいない。」

「なんだあ？元気がねえな？どうした？」

「……お前は元気すぎ。ちょっとはそのスイッチをOFFにしないか？」

「なんの！オレから元気を取ると何が残る！？」

「なかなかイケメンな面と、鍛えられたいい感じの体。」

「ふっ、褒めるなよ。照れるじゃねえか。」

「……お前のそのうざったいくらいの元気が

モテる要素を低くしてるって意味なんだけどな……」

「コイツは宝道元気^{たからみちげんき}。俺のこっちにいる唯一の友人だ。」

その名の通り、元気が溢れ出ている！って感じの奴。

しかし、そのイケメンさに女子からの人気が高い。

……もつとも、それは元気の性格を知らない人だけだ。

この元気が少し、いや、かなり暑苦しい。

「（それに助けられた事もあるがな……）」

コイツの元気に、俺は救われた。

こっちに来てから、受験だ何だで、交友関係を広めて深める事は無かった。

そのせいで、全然友人が出来ていなかった。

一人で高校に行く事に、心の奥底で孤独感を感じていた。

そんな時、元気と出会った。

誰彼構わず平等に接する。コイツの明るさ。

そして一人で孤独だった俺に手を差し伸べてくれたコイツの優しさが嬉しかった。

まあ、元気との出会いはそんな感じだ。

「さて、もう高校が見えてきたな。」

「ああ。……そういえば、前に言っていたが、お前は生徒会に入るのか？」

「そのつもりだ！オレはいずれ生徒会長になりたい！

そして、この学校を陰ながら支えたい！」

元気は生徒会に入りたと言っていた。

まあ、この性格で生徒会長つてのは俺のイメージが崩れるが、
会長になれると決まったわけじゃないし、どうでもいいか。

「まあ、頑張れよ。」

「おう！……そんなじゃ、クラス分けどうなったか見ようぜ！」

「ああ。えっと……俺は……C組か。」

「オレは……お！オレもC組だ！」

元気と同じ、か。まあ、助かったと言えば助かったか。

知ってる人間が1人いるとこないとじゃ大違いだからな。

「そんなじゃ、行くこうぜ。」

「ああ！」

俺はC組に行く。既に何人が来ているようで、それなりに騒がしかった。

そこから、SHRがあつて、入学式があつた。

別に大した事は無かった。

ただ、お偉いさんのありがた〜い祝辞を聞いたり、

深く礼したり、されたり、ってだけ。何の変哲も無い式だった。

そして、放課後。

部活をやっているところはやっているようで、俺は軽く見て回る事にした。

ちなみに元気は「さっそく生徒会を見に行くぜ！」と言って駆けていった。

「ふうん、体育系の部活も悪くないかもな。

さて、次は文化系のを……ってアレ？なんだこの『恋愛相談部』って。」

文化部の欄に、そう書かれていた。

「……無視だな。」

「そうはいかないわ。」

俺はいきなり響く声に振り向く。

そこには、紺色の制服を身に纏い、ロングヘアの女子生徒が立っていた。

「（先輩……か）」

この高校、あいぜん愛染高校は学年毎にネクタイorリボンの色が変わる。

1年は青、2年は緑、3年は赤と言った具合にだ。

目の前の先輩は赤のリボンをしていた。

つまり、愛染高校の3年生という事だ。

「えっと・・・何か？」

「キミ、最近フラれたね？」

ぐっ！な、なぜそれを！？

「ど、どうして・・・」

「私には分かるのよ。・・・さて、そんなフラれた君に質問です。

「

古傷がああ！開く！開いちゃううう！！

「キミは最近フラれてしまい、恋愛に困っている。

そして、この学校には、私が部長の『恋愛相談部』という部がある。

これからキミは何をすればいいのでしょうか？」

「・・・早い話が、見学しに来てって事ですね・・・」

はあ・・・まあ、ちやつちやと見て他のところ回るか。

うなだれていると、目の前の先輩が口を開く。

「うーん、残念。惜しいなあ・・・」

「え？惜しいってどういふ事ですか？」

「キミには・・・この部に入ってもらおうのよー！」

・・・入？

「・・・なぜ？」

「キミの恋愛経験を是非とも我が『恋愛相談部』に貸して欲しいのよー！」

・・・というわけで、さ、行きましょーっ。」

と、俺は制服の襟を？まれ、そして引きずられる。

「ちよ、離してくださいってー！」

「だってこうでもしないと、逃げちゃっついでしょ？」

う・・・凶星・・・

「あ、自己紹介が遅れたわね。私は神立愛沙かみだてあいさよ。」

俺を引きずりながらそう言う先輩。

「俺は五十嵐未勇といいま　　痛っ！先輩、階段はちよっ
痛っ！」

・・・俺の高校生活、どうなるんだろう？

恋愛相談部とは・・・（前書き）

どーも、鈴野宗一郎です。

最近どうにも疲れ気味です。

学校の課題も終わってないし・・・

財布の中身は4円・・・

これから先、どうやって生きていけば・・・

・・・ようこそ恋愛相談部へ！、始まります！（ヤケになった）

P・S 少し内容を変えました。ほんの少しですけど・・・

恋愛相談部とは……

引きずられながら連れて来られたのは、

1つの部室と思われし部屋。

ドアに『恋愛相談部 部室』と掛札が下げられている。

「さ、入りなさい。」

「えっと……僕、トイレに「ウンね？」……はい。」

もうここまで来たら覚悟を決めよう。

「し、失礼します!」

俺はドアノブを捻り扉を開ける。

すると……そこには……

「きゃああー!」

……おそらくジャージから制服への着替え途中の女子生徒が居た。

・・・最低だよこの人。面白いからって・・・

先輩って言ったということは今の方は2年生だろう。

「で、着替えは終わった？」

「え、ええまあ・・・」

「じゃ入るわね～。・・・あ、五十嵐君も入るのよ。」

あ、しまった！今の内に逃げ出せばよかったー！

「まさか逃げるつもりじゃないでしょうね？歩美の着替えを見ておいて。」

「ぐっ・・・あ、まさか最初からそのつもりで・・・！」

「さあ〜どっかしらね〜？」

・・・本当に最低だ・・・ってか、悪魔かも・・・

「さ、歩美の着替えを覗いた事を言い触らされたくなければ入りなさい。」

「脅迫！？そして命令！？」

ついに本性を現した・・・この悪魔があああ！！

「で、どうなの？」

「……わかりましたよ。」

俺はドアノブを捻り、再び部屋へと入る。

そこには机（学校とかによくある長机）が2つあり、

イスが5つ、3つと2つに分けられていた。

そして、そのうちの1つに、

「あ……」

さつき着替えていた先輩が居た。

ふわふわとした長い髪の毛で、優しそうな顔立ちをしていた。

リボンが緑なことから、やはり2年生らしい。

そして目が合った。

「えっと……さつきはすみませんでしたー！ー！」

俺はふか~~~~く謝る。

「い、いえ。もういいですから……」

「……あぁ、この世界に天使はいた……」

普通、兎に角怒るか、何か見返りを求めかねないと言うのに、

この人、いやこの方は優しそうな微笑を浮かべ、お許しを……

「いいの？歩美。高そうなお菓子とか、いい感じのバッグとか、

なんなら現金を要求してもいいのよ？」

……この先輩ならそうしたな。

「べ、別に欲しいものとか無いですから……」

「ふん……まあいいわ。紹介するわね！」

この恋愛相談部に入ってくれる新1年生の五十嵐未勇君よ！」

まだ入るって決めたわけじゃないのに！？

「先輩、俺入るって決め「言い触らすわよ？」……ぐっ……

……わかりました……入ります……」

この先輩……いつか潰す……！

「よろしい。で、こっちは2年生の浦塚歩美ちゃんよ。」

「えっと……よろしく、五十嵐君？」

「はい……よろしくお願ひします……」

「うん。大変だろうけど、頑張ろうね？」

たぶんこの先輩の扱いが大変になると思う。

いや、たぶんじゃなくて間違い無く。

「あと2人足りないわね……環奈かんなと理衣沙りいさちゃんは？」

「加宮崎先輩かみやさきは『今日は休む』と言ってました。

三城みしろさんは教室の掃除があると……」

他に2人いるのか……

「そう。わかったわ。環奈はいろいろあるからね。」

そう言って、中央の席に座る。特等席か何かか？

「さて、五十嵐君。名前から分かるだろうけど、

「この部活は何をする部活だと思う？」

まあ、そりゃあ恋愛相談部だし……

「学校の生徒の恋愛の悩みに対して相談を受け付ける部、ですかね？」

「そう。でも少し違うわ。この学校に限らず、他校、近所、インターネット上、

様々な人の様々な恋の悩みを相談してもらって解決する部よ！」

なんじゃそりゃ。そんなの部として認められるのか？

「ふふっ、今、『こんなの部活として認めていいのか？』って思ったわね。」

う、心を読まれた。

「大丈夫よ。この部には理事長の孫娘もいるし、

それに、実績もちゃんと上げているのよ？ねえ歩美？」

「ええ。まあ……」

へへ、意外だなあ。こんな部がきちんと活動して、実績もあるなんて。

理事長の孫娘……この2人のどちらかなのか……

それとも、さっき言ってた2人の

「去年は40人ほど学校内で依頼を受けたわ。

他校の生徒とかも含めると、70人ぐらいになるわね。」

「そ、そんなにですか!？」

なら、部として認められなくは無いだろっ。

でも、問題は……

「でも、それって結果はどうだったんですか？」

ピシッ

あ、固まった。

「え、えっとその、それは……よ……」

「え？今なんて……？」

「0人よ！0人！！告白した人は誰も付き合うまでに発展しなかったわ！」

終わった後に、『残念だったけど、気持ちの踏ん切りがついてよかった。』って

答えしか返ってこなかったわよ！！

付き合っている人の相談においては、なんの解決も出来ずに終わっちゃったわよ！

別れるか、自己解決でね！

私達恋愛なんてした事もないから、頑張れと応援するしか出来ないのよ！」「

それって、実績ありって言わないんじゃない？

「じゃ、じゃあどうしてこの部を作ったんですか？」

「……と、とにかく、五十嵐君には恋愛経験があるのだから、

その経験を私達に貸して欲しいの！ううん、貸すの！」

誤魔化したな。間違いなく。

「断れば……わかってるわよね？」

「う……はい。」

「それじゃ、来週休み明けのテストでしょ？」

それが終わった後に入部届け提出期間になると思っから、それまでは来なくていいわ。

さすがにテスト勉強したいでしょうし。」

まあ……それはありがたいな。

「分かりました……では、また来週。」

「ええ。待ってるわ！」

「またね。」

俺は部屋を出る。

はぁ・・・俺の高校生活、いったいどうなるんだ？

二回目の（前書き）

どうも、鈴野宗一郎です。

近頃、この小説が某憂鬱な団長様のラノベに

似ている気がしてなりません。

まあ、ファンタジーな要素は欠片も含むつもりはないんですけど。

どうなんですかね……

では、始まります。

二回目の

ど〜も〜五十嵐未勇で〜す。

というわけで終わってしまいましたテスト期間！

もっと続けてもらっても・・・まあ、終わった事をくよくよしても仕方ないか。

・・・ん？テストの出来？まあまあって感じ。

可もなく不可も無くって事。

大体1教科60点前後だと思う。な？可もなく不可も無くだろ？

可もなく不可も無く〃地味って事に繋がるけどな・・・はあ。

そして現在。俺は帰る準備をしています。

え、約束？なにそれ？おいしいの？

さ〜て帰る「五十嵐く〜ん？」・・・来ちゃったよこの人。っていうか、

「どうしてこのクラスに居るって分かったんですか？」

「先生に聞いたのよ。」

なるほど・・・ってか、そこまでするか？

「さて、じゃあ先輩、さよなら。」

「あ、うん。さよなら……って違うわよ！さあ、行きましょ
う？」

と言って、俺の腕に関節技を決め込みながら、俺は部室に連れられ
ていった。

「おい、見たか？五十嵐……だっけか？」

「ああ。アイツ、あんな綺麗な彼女が居るなんて……」

「しかもあれ先輩だぜ？ま、とにかく……」

「……………ヤツを潰す！！」「……………」

クラスメイト（未勇以外の男子限定）の結束は、1人の人物により、
僅か1日でより固くなった。

「！なんかやな予感が……」

「何言ってるの？さ、着いたわ。」

「えっと・・・僕トイレ」「ウソね?」・・・はい。」

なんか、お決まりになりそう。

コンコン

ドアを叩く。前回の失敗からの配慮だ。

返事は・・・ない。って事は誰も居ないのか・・・

そう思いドアを開けた。

この時の俺はとにかくバカだった。

なぜ誰も居ないのに、ドアは既に開いていたのか。

なぜ誰も居ないのに、神立先輩は俺を先に行かせたのか。

なぜ・・・2回目があることを想定しなかったのか。

そう、つまり・・・

「はい?」

ドアを開けて俺は言う。

「……………」

そこには着替えているポニーテールの女子が居た。

「あつと…………えつと…………すみませんでしたああああ……!!」
すぐさま部室を出る。

「先輩…………また、謀りましたね…………」

「ふふつ、騙される方が悪いのよ。しかも、ほら。」

そう言つて携帯電話を俺に向けてくる。

そこには…………先ほどの俺の姿が映し出されていた。

「前回と違って、今回は証拠アリよ。これで君は逃げ出せない。」

「そ、そこまでやりますか…………?」

「ええ、もちろん!中々の恋愛経験がある高校生なんてそうそういないものなのよ!

それをみすみす見逃す私じゃないわ!」

かと言って、そう当てにされても困るんですけど……

「ってか、今更もう辞めたりはしませんよ。」

「あらそう？なら、さっさと入りましょう？」

ドアノブを開け、ふたたび部室に入る。

そこには先ほど着替えていた女子が居た。

ポニーテールに、凜とした目。おそらく先輩だろうな。

堂々としているその姿には、きつと誰もが目を向ける事だろう。

「すみませんでしたああ！！！」

2度目の謝罪in土下座。

「……別に気にしなくていい。」

ああ……この方も、この罪深き私めをお許しになさるのですね……

ありがたや……ありがたや……

と心の中で拝んでいると、

「環奈も何も要求しないのね。私なら、とことん言いつけるのだ。」

この先輩は……！

「……見られたところで、見た人に良い事も無いだろうから。」
ええっ！？かなり綺麗なのにな……

「またまたあゝ、仲良くなりたいた異性の人3年女子部門第1位が
何を言っているんだか。」

そんなものがあつたのかよ……

「……私に同情してくれただけ。」

……同情票で1位にはなりませんって、普通。

この人は、堂々としていと思うけど、

どうやら自分に自信が無いみたいだな。

……いや、きっと堂々とはしているのだろうけど、

自分の事だけは別なのかもしれない。

「……彼は誰？」

「あつと、環奈にはまだ紹介してなかったわね。」

我が恋愛相談部の新しい部員よ！名前は五十嵐未勇君！」

「ども……五十嵐未勇です。」

「……加宮崎環奈。」

加宮崎先輩か。そういえば前に名前だけ聞いたな。

あの時は休みだったんだよな……

「……よろしく。」

「あ、はい。よろしくお願ひします……」

「さて、自己紹介も済んだし、活動を始めましょうか！」

活動ねえ……ってあれ？

「あの、浦塚先輩は？」

「ああ、歩美は今朝会った時に休むって言ってたわ。」

理衣沙は…たぶんテストね。今日遅れてきたみたいだし。」

もう1人の部員か。

その人で全員なんだろうな。

「そういえば、活動って何するんですか？」

「まずは、パソコンで部のサイトに恋愛相談の申し込みが来てないかを」

確認するところから始まるわ。」

棚の横にあるパソコンを指さして言う神立先輩。

電源が入っているという事は、加宮崎先輩がもう見たんだろっな。

「さすが環奈。既に確認済みのようね。」

「……誰もいなかった。」

「そう。じゃ、第2段階に移りましょう。」

第2段階？

「あの、先輩。第2段階って……？」

「この部屋に相談者が来るのを待つよ。」

もちろん、時々パソコンのチェックもしながらね。」

「……ってことはつまり。」

「……なんか暇潰ししてると？」

「そういう事になるわね。」

なんつー適当な……

「ま、最初だし、気楽にしていいいわ。どーせ今日はテストの日だから来ないし。」

「え？テストの日だと来ないんですか？」

「そうよ。だってみんなテストが終わって浮かれてるもの。」

カラオケ行ったり、ゲーセン行ったり・・・

そんな時に来る人なんて

ガチャ

「あの・・・今日って恋愛相談部の活動、してますか？」

俺にとって最初の恋愛相談部としての活動が始まった・・・

最初の相談（前書き）

書くたびに思う・・・

やっぱりこれハ ヒじゃねえか!?

・・・すみません、取り乱しました。

では、始めます。

最初の相談

五十嵐未勇です・・・

入部初日で相談者が来るとは俺自身も思ってた・・・

先輩の言う通り、テスト終わりだし・・・

はあ・・・俺、何すれば良いんだろう・・・

「それで？まず、あなたの名前は？」

「あ、はい。西田瑞稀にしだみずきと言います。」

「瑞稀さんね。そのリボンからして2年生なのね。それで、相談内容は何？」

「ああ、もちろん他の人に話したりはしないわ。秘密厳守だからね。」

神立先輩が相談者の西田先輩に詰め寄るようにして聞く。

「私、今2つ年下の彼氏がいるんです。」

西田先輩はなかなか整った顔つきで、ショートヘアの髪型、体

型はスラッとしている。

陸上部か何かの体育系の部活に入っているのだろうか。

それにしても、年下の彼氏が・・・逆に言えば、年上の彼女って事だよな。

良いよなあ。こんな人が彼女なんて幸せ者だな、そいつは。

「へえ〜。それで、その彼氏がどうかしたの？」

「実は・・・春休みの初め頃までは、頻繁に会っていたんですけど・・・」

「ここ最近、全く会うことが無くて・・・」

全く会う事が無い・・・用事でもあったとか・・・

「何か用事があったんじゃないの？」

俺が聞いたかった事を、神立先輩が効く。

「何も聞いてませんし、彼の友達に聞いても、『いつも通り過ごしてる』と・・・」

この間も、その友達と遊びに行ったらしいです。」

うーん・・・これでその線は消えた、と言っていいだろう。

友達と遊ぶ余裕があるんだ。全く会わない、なんて事はありえない

だろうし。

「その彼氏の家は近いの？」

「いえ、電車で一時間ぐらいした先です。彼が中学2年の時に付き合って、

たまにで良いから会おう、という形で今まで過ごして来たんです。

でも、最近約束すら出来なくて・・・私、嫌われてしまったんですかね・・・」

するとその時、神立先輩が立ち上がり西田先輩に向かって言い出した。

「別れちゃいなさい！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・へ？今何て言ったこの人？」

「そんな自分の可愛らしい彼女を放っておいて、男の友達とばかり遊んでいるような野郎なんて、別れてしまった方が良いわ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・神立先輩？」

「ん？何？五十嵐君。」

自分のセリフを一旦切り、こちらを向く神立先輩。

「それはちょっと早計じゃないですか・・・？」

「なによ、私が言った事間違ってる？」

間違っではないない。間違っではないないが……まだ決まった訳じゃない。

「先輩が言った事は正しいですけど、まだ確証を得てないじゃないですか。」

そんな状態で別れろってというのは間違ってますって。

それに、そんな単純じゃないです、この問題は。」

そう、そんなに単純明快な相談内容じゃないぞこれは。

まず、彼氏の真意。

本当に西田先輩の事を放っておいているのか。

実は何か別な理由があるのではないか。

そのためには、まずその彼氏の事を知らないと話にならない。

そして、もう一つ重大な事が残っている。

それは……この2人がどういう経緯で付き合ったのか。

電車で一時間。かなりの距離であるはず。

そんな2人がどうして付き合う事になったのか。

彼氏が中学2年の時、という事は西田先輩は当時は高校1年生。

学校も住んでいる場所も違うのに、どうして付き合うまでに発展したんだろっ。

しかも、西田先輩はその彼氏の友達まで知っている。それも、かなり親しいようだ。

これらに関しては西田先輩に直接聞くしかないだろう。

・・・教えてくれるとは限らないがな。かなりプライベートな事だし。

かなり複雑な問題だな、これは・・・

「（・・・って、なんで俺は冷静に分析してるんだよ。）」

気がつくところの相談事に首を突っ込んでいる自分がいた。

「・・・ふうくん。じゃあ、五十嵐君の意見を聞かせてよ。」

何か俺を挑発するかのように見てくる神立先輩。

「・・・私も聞きたい。」

あ、そういえば加宮崎先輩いたんですね。

先輩・・・なにかしら話しましょうっよ・・・

言っちゃダメだと思いますけど、空気です。

「……………(シユン)」

……………なんか加宮崎先輩が落ち込んでる……

もしかして、心を読まれた、とか……………?

ざ、罪悪感と申し訳なさが胸いっぱいに込み上げてくる……………
!!

本当にすみません！心の底からすみません！！だからそんな顔をし
ないで下さい！？

「五十嵐君、後でちゃんと環菜に謝っておく事。わかった？」

「もちろんです。」

「とりあえず、相談が優先よ。あなたの考えを聞かせて頂戴？」

俺はさっき分析した事を先輩に伝える。

「……………えっと、まず、しめんなさい。」

俺の話を聞いて、西田先輩に謝る神立先輩。

自分の言った事の意味が分かったようだ。

「い、いえ、気にしないでください。」

「そう言ってもらえると、助かるわ・・・」

どこか遠い目をする神立先輩。

もしかして、今まで失敗だったのって・・・この人のせいなんじゃ・・・

「えっと、話を戻しますけど。西田先輩、

その彼氏と付き合う事になった経緯を教えてくださいませんか？

もちろん、言いたくなければ構いませんから。」

「あ、いえ。分かりました・・・他言無用でお願いしますね・・・」

「もちろんです。」

西田先輩はゆつくりと語り始めた・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0065y/>

ようこそ恋愛相談部へ！

2011年12月6日23時49分発行